大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十六卷　第五號

昭和十三年五月一日發行

論叢

貨幣と利子……文學博士　高田保馬

支那農業の片影……法學博士　財部靜治

ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價……文學博士　米田庄太郎

貨幣の本質とその價値……商學士　中山伊知郎

時論

物價騰貴と消費節約……經濟學博士　谷口吉彦

研究

再保險形態の究極的發展……經濟學士　佐波宣平

中立貨幣と外國爲替相場……經濟學士　中谷實

ダンピングの理論……經濟學士　岡倉伯士

說苑

幕末の上海貿易……經濟學博士　本庄榮治郎

差額地代と限界生產力說……經濟學士　上村鎭威

附錄

雜報・外國雜誌論題

（禁轉載）

支那農業の片影（中）

財部靜治

四

文明の歴史は埃及人及カルデア人に始まれるも、西暦紀元前十五世紀以降歴史の預る所はアリアン及セミチックの二類民族に限る。後者は商民族たりしフェネシア人、宗教民族たりし猶太人、戰民族たりし阿剌比亞人を含みしが、アリアンは一部は印度に他の一部は歐洲にその家鄉を發見し、過去に於て世界の先頭に立ち現に又その譽れを擔ふ諸國民を生めり、往古にありては哲學及宗教の大思想民族としての印度人、藝術及學問の創作者たりし希臘人、東と西とに古代大帝國を築きし波斯人及羅馬人を生み、近時に至りては佛蘭西人、獨逸人、和蘭人、露西亞人、英米人を生みたりとは、史家 Seignobos がその著古代文明史中に大觀せる所なり。[11] その視野内に宿さざるが爲めに然りしや、或は知りつゝ故意に是を逸脫せしめしやを知らずと雖も、古き農業文明が東亞特に支那に於て燦然たりしを傳へざるは物足らぬ心地せらるゝ所なり。

太古茫邈の世より農業は支那人の主生業たりき、而して支那の土壤は特に揚子江黃河間の大三角州幾多河川流域の數々に於て極めて肥沃なり、實に支那文化が育成されし國土の特別外界性狀が前亞細亞又は近東洋（土耳古、

11) cf. Ch. Seignobos, History of Ancient Civilization, 1907, pp. 18, 19.

埃及、イラン、イラツク、シリアン・レバノン、パレスタイン）の諸自然事情と大に異れるの事實に制約せられしや注意するの要あり、地理的諸條件の特異は國初より今日に至る迄支那の實態上鮮明に呈露せらるゝや、西洋の諸民族及國家構成に於けると異ることなきも唯その仕方に於ては相違したり、即ち原始支那人が流水なき內部亞細亞より太洋へ流出すべく季節風橫斷によりその氣候を決せらるべき黃河水脈諸盆地への最初出路を發見せるに當り、その從來に於ける生活及開化形態に完全變化を遂ぐるの外なかりしならん、その本源の占地が何處なりしとするも、そは內部亞細亞及その邊境が流水及季節的降雨に乏しきこと、並に水なき荒野及山腹原野に比し灌水さるべき耕地狹小なりし事態の下成立し得べき生活を營むの外なかりしならん、全ツラン（波斯の北方、トルキスタンを含む）及イラン（波斯）はかゝる砂漠內沃地なり、チグリス、ユーブラテスの下流域は地域的に一層宏大なる耕作不能地域內にあり乍ら割合に手弘く灌水され得べき砂漠內沃地に外ならず、されど支那の前記新境土は新來者をして無限展開の希望に燃へしめ、雨水に惠まれ蜿蜒たる耕地を耕やすの可能を意の儘に遠く太洋に及ぶ迄も推し進め得たり、吾人は曩に氣候及土壤の性質に訴へ北支の多くが何れの日か嘗て樹木昌へしことありしや疑はしとせるも、そは半涸渴又は砂漠の地に於て然り、されど惟ふに是等新境土にはその當初山岳地のみならず大平原にも天林存せしなるべく、そは來住移民の進出により犧牲に供せられしならん、かゝる事情變化の下先づ達成せられし第一事は人口の比類なき大增加間斷なく遂げられしことにあり、西部諸國の砂漠內沃地域及山腹原野にありては自然的特別生活條件により自然の人口增加に就き、或は廣く或は狹きの差ありても視易くして究極には踰越を許さざる限界加へられたり、その結果として繁かるべき戰亂的政治的生存競爭並に耕地及パンに關する自然との鬪

爭疾呼の如く深く又强く、國民的一特別體系の現出に影響すべき一因子別に存すべきことを考へ得べきや、そはかゝる事情の下來住移民相互間たると又一原住民族との間たるとを問はず、何等の鬪爭なきを考へ得ざると等しく考へ難き所なり、又自然が自から提供する所外觀的には無限なるが如きもそは實際的には信じ得べきことたらず、何れにしても一面支那人の祖先に於けると他面內部及西亞細亞に住める諸民族に於けると、土地、氣候、生存競爭への强制により性格化育の影響を異にせるは、高く評價さるべき所ならん、かく支那發展の初期が全く特殊の事相を呈せることを顯彰するものは、支那人がアリアン及セミチックの二民族間に見るが如き神話及英雄譚を有せざるの事實に如くは莫し、その前史的英雄は人に火を授け家作、耕耘、諸種穀、漁撈を敎へ、文字を發明し、市場及商業交易を開くが如き事に當れる平和の英雄なり、孟子が當堯之時、天下猶未平、洪水橫流、氾濫於天下、草木暢茂、禽獸繁殖、五穀不登、禽獸偪人、獸蹄鳥跡之道、交於中國堯獨憂之、舉舜而敷治焉、舜使益掌火、益烈山澤而焚之、禽獸逃匿、禹疏九河瀹濟漯而注諸海、決汝漢、排淮泗、而注之江、然後中國可得而食也、當是時也、禹八年於外、三過其門而不入、雖欲耕得乎(滕文公章句上中)と支那古代經濟史觀を極めて簡潔に吐露せるや眞に古今の名文にして由來吾人の愛讀措く能はざりし所なり。古支那の國民性は現在の北支河流域及大平原に於て伐採用の斧及農民の犁を以てせる侵略により、又に血塗ること比較的に尠くして形成されたり、虞らくは今は滅落せる原住民族が夙に來住支那人以前に玆所に占據せるも、そは北亞及東亞に於ける森林民族に見たる如き特別の抵抗力を有せざりしならん、西亞、ツラン、イラン及古ユーフラテス開化地城、尙又印度及 Jaxartes (トルキスタン Sir Daria 河の古名)裏海黑海を圍める大山腹地にては、鬪爭は實際上萬象の父たりき、 Gilgamesch-

Epos（古アッシリア・バビロンの神話）より中古獨逸俗謠 Niberungen に至る迄、世は地上に又全地球を掩ひ歴々劔の戛鳴及軍歌に轟きたり、されど支那に於ける戰亂の步調は史書之を傳ふるの後に至りて創めて始まり、而もその史乘には勇將詩及戰鬪歌を見ず、寧ろ淡々たる敍事中之が些少の存考を宿すに過ぎず。[12]

遠西の聖教を待つ迄もなく無數世紀を通じ眞らくは單に生めよ殖やせよ地に滿てよの趣旨をその眼目とせる支那民族の前史が、如何に强く又如何に深く後世に於ける支那精神界の創成に影響したるかは、有史時代の初めより今日に至る迄社會的宗教的綱紀としての家族が、支那人の全生活を支持又左右し、祖先崇拜、家族の完顧、家系承繼の義務が如何に根强くその社會哲學として培はれしかを察知することにより推測するを得ん、多くの原始民族に於ける如く所謂萬有精神論（アニミズム）の形式によれる祖先崇拜は支那原人にありても亦既にその俗的宗教觀念界に大なる働を占めしなるべし、されど支那にありては別に尙その規則正しき降雨により直下に作付可能となさるべき大面積の土地開拓の元基的經過備はれるあり、家族尊重以外この事情を伴ふことなかりしものとせんか、右信念が啻に俗人宗教意識たるのみならず識者の哲學的倫理從ひて又公認國教の持久的基本たるに至るの機緣とは辛うじて成り得ざりしならん。

單純（シムプル）ならざるも常套（ルーチン）又泰平（プリドリヒ）なる農業の營みは、支那にては今日に至る迄感覺の理想的尊重に於けると同樣、只管に實際の社會及經濟關係上民族の理想たることを續けたり、蓋し政府及その他の諸施設並に諸階級民に於ける諸物は、根本に於ては耕地の作付、農場作物の成育、地方民の福祉を奬むるをその目的とするのみたり、支那に於ける國民の生活は耕地及收穫を廻りて輾轉し、率土は支那人にとり萬端なるが故にその家族感はその宗教とな

12) cf. Paul Rohrbach, Deutsch-Chinesische Studien, 1909, SS. 7–9.

れり、近世支那の諸部分人口過剩のために一時的出旅のみならず事實上の往住も起れるの事實により、支那人が生來の支那人としては深く地に根ざせる農人の典型たり、又依然としてその狀を續けたるの事實に就き狐疑することあるべきに非ず、而して原始の萬有精神論を家族と田畑との自然的混合發生態たるが如く保守せしむるに適し、又今日に至る迄堅持さるる祖先禮祭の儀禮を發達せしむるに適せること、右の事實に勝るべき何物も存せざりき、人の諸々なる營みは別の如何なる種類によるも支那農民の原始農業的現物經濟並に之に伴ふ各個家屬の無料使役、絶對服用の如き程度に家族の構成及維持に資するはなし、即ちそはその各個家屬が纖弱なる幼少時よりその力に相應せる生存資料作出への分擔、相應に遂行せらるゝ田畑、家內又庭にての物的分勞によりて然り、公認國教の如き他の諸元素が（外來の佛回兩教は別論）祖先の祭及家族尊重と直接關聯を有せざる程度に於ても、一樣に徹頭徹尾農業的家長的經緯に本づくとせば同じく又之に相符す、同樣に田畑及雨の神、その他凡て陸上及氣界の靈異、最後に又「天」そのものに關する觀象又記述し難き「固有」觀念も亦然り。[13]

Latourette によるに支那人口の八五％（即ち五分の四・二五、近來の述作上屬引用せる Murdoch は五分の四とす、そは歐米人による梗概的見積りの一班なり）は現に農業に從事すと見積らるゝも、その數は精確とすべからざること遠し、假りにかゝる高さに及ぶべしとせば農事に關聯ある諸職業、例へば村及市場町に於ける商賈、工匠、鍛冶屋、料理店主等、並に農產物を農場より諸都市に運ぶことに與るべき多數人を算入するの要あるべし、されど支那人の大多數は直接農耕及之と脣齒の關係ある諸職業により養はれ來り又現に養はる、農事への靈瘁が自然の環境により助長せられたるは前に說けるが如し、實に農民問題は支那に於て太古以來幾十世紀を通じ殆んど一般人口問題

13) cf. Rohrbach, a. a. O. SS. 9–11.

と同視されつゝ、社會及經濟生活との之が緊切なる關係は歴代の識者により重視せられたり、試みにその一例丈けを採らんか、戰國末に於ける韓非子の著書中五蠹（近習、學者、執劍者、商、工）篇には曰く古は人民少而財有餘、故民不レ爭、是以厚賞不レ行、重罰不レ用、而民自治、今人有二五子一、不レ爲レ多、子亦有二五子一、大父未レ死、而有二十五孫、是以人民衆而貨財寡、事力勞而供養薄、故民爭、雖レ倍二賞罰一、而不レ免二於亂一と、又曰く饑歲之春、幼弟不レ饟、穰歲之秋、疏客必食、非下疏二骨肉一愛中過客上也、多少之實、異也、是以古之易レ財、非レ仁也、財多也、今之爭奪非レ鄙也、財寡也と、又八說篇には曰く古者人寡而相親、物多而輕レ利易レ讓、故有下揖讓而傳二天下一者上、然則行二揖讓一高二慈惠一而道二仁厚一、皆推（古）政也、處二多事之時一用二寡事之器一、非二智者之備一也、當二大爭之世一而循二揖讓之軌一、非二聖人之治一也、故智者不レ乘推（は椎）車一聖人不レ行二推政一也と、かの后稷教二民稼穡一、樹二藝五穀一、五穀熟、而民人育、人之有レ道也、飽食煖衣、逸居而無レ教、則近二於禽獸一、聖人有レ憂レ之、使二契爲二司徒一、教以二人倫一（滕文公章句上中）とせる孟子が、重農を說きつゝも人倫道德を第一義に推せるに對し社會の經濟的基礎を重視すること一層甚しく、その結果古聖哲の跡を誹謗することを厭はず、又商工を賤しみて末作とし法刑を加へて之を抑へんとせる韓非子が、國民の富は食に不足せざるの民衆にあり、徒らに人口夥しきのみによりて然りとせずとなせるの趣旨を採れるは注意すべし。[14]

支那本部の面積及人口が農業的たり、從ひて食糧供給上大體に自給的たるは印度に酷似せり、されど支那には耕作に適せざる山地の割合遙かに多く、その結果諸盆地その他の肥沃なる地域は通常人口極めて稠密なり實に支那の人口最も稠密なる農業地區に於ける一平方哩當り人口は多分世界の他の何れの國に於けるより遙かに大なら

14) cf. Latourette, op. cit. II. p. 69; John Lossing Buck, Chinese Farm Economy, 30, p. 353.

ん、King がその痛快極まれる著書（前掲）中見積る所によるに、多くの地域に於て單一平方哩の土地により三千の人と千の家畜とはその生命を支ゆ、他の地域中四千人以上なるものさへ發見され得べし、素より是等の計數は歐洲中人口が輸入食糧により養はるゝ諸地域の稠密なる人口と直接に比較さるゝを得ず、支那全般として考ふるに人口一人當り耕地面積〇・四噸よりも寧ろ以下なり。又 Latourette が近年北支及中東部支那の六省內諸部分に於ける一調査の結果に據り記する所によるに農場約三千四百の平均面積は稍五噸を超へ、その間安徽の二縣に於ける稍十噸餘の平均より福建の一縣に於ける約二・五噸に亙る相違を伴へり、略是と時を同しくして行はれし他の一調査によるに江蘇に於ける農民の三分の二、河北に於ける農民の半數有餘は一噸又はその以下の土地により生計を立てつつありき、而してその平均保有地として示す所江蘇にては約三・二五噸、河北にては約四噸たりき、凡そ豫期され得へきが如く雨量尠き北支にては平均農場面積雨量一層多く繁茂期永く稻の產出に富み又一年中通常二毛作以上を施し得へき揚子江流域又は南部沿海地方に於けるより大なるへきも、以上引用せる諸計數は概數とすへき以上幾何の信賴値ありとすへきや疑はしき所たり、又諧謔を弄せる者としては支那の數矮小農場をその大さ上ナフキンに譬へたる「變リ行ク支那人」の著者社會學者 Ross の如きも存すと雖も、全支を通し大小農業經營の分配を確實に調査したること未だ曾て存せざるは、支那經濟善導の經綸を建てんとする者の深く留意すべき根本義なり。[15]

Messers La Fleur and Foscue (Economic Geography, Vol. III. 1927, pp. 297–308) は近年支那の農產に就き興味ある一研究をなせり、その指摘せる所によるに支那領土の全部（支那本部、蒙古、新疆の外滿洲通算、但し西藏を含まず）と

15) cf. Stamp, op. cit., pp. 461, 462.; Latourette, op. cit., p. 70; Bashford, op. cit., pp. 32, 33.

しては總面積二、四四〇百萬噸なり、半分は餘りに涸渇せるか(一、一四六百萬噸)又は餘りに寒冷(六四百萬噸)なり、山は五分の一(四八八百萬噸)を占むる以外瘠地三六百萬噸を掩ひ、耕作に適すとして餘す所全國土の二九%(七〇六百萬噸)たり、而も亦その中實際に耕作せらるゝは約四分の一(一七六百萬噸)に過ぎずと見積らる、かくて著者は問へり「支那は絶えずその溢るゝ數百萬人の食物缺乏を告ぐるに、何故に可耕地の四分の一を限り耕作せざるべからざるか」と、その答として茲に着想され得べき唯一事は、支那が機械を缺きその必然の結果として力足らず、限界地を開拓するに到り得ざることに存す。[16]

されど恰も以上引用せる計數は事態の敍說として理想を盡し得たりとせず、その中には實際上全く別異なる諸國土を含めばなり、支那に關して地方別の考察を伴ふの要あるは前にも力說せる所、實に蒙古は揚子江流域の支那農民にとりては全く知られざる外國たり、かくて未耕地として上に擧げたる地積を開拓すとの謂は、何は偖置き第一に新土への多勢移住を意味すべし。

此問題に關聯し特に降雨偶々乏しき結果旱魃の禍害を生むこと揚子江流域に比し大なるべき北支問題としての著人口過剩に就き、適切なる救濟策を考案するが如きは一難關たるに似たり、合理的見地よりせば明瞭なる一解決策は滿洲の曠野及蒙古の人烟稀なる邊境に宿さるべし、素より從來既に北の諸平原より是等地積への絶えざる溢出は存したり、されど滿洲に就きては獨立國となれる今日純經濟論を以て推し得ざるものあり、一般に又出鄉者の大部分は一時的移住にして眞の植民的移動は一小部分のみ、人口過剩の慘狀を呈するも支那民族の習性上移住を快く決行せざるの風あるは前にも說けるが如くなるを奈何せん。今日極東熱帶地方詳言すれば馬來、印度支

16) cf. Stamp, op. cit., p. 462.

那、東印度及非律賓に夥しく移住する支那人の大多數は、傳習的諸觀念より或程度迄釋放されし廣東人なり、されど海外にある是等廣東人と雖もその故鄉と密接なる聯絡を保ち、老年に至り海外にて蓄積せる富を持して歸國するは頻繁なり。[17]

支那人口に關する近年數調査の結果(內閣統計局雜誌統計時報第七七號が全獨統計局雜誌 Wirtschaft u. Statistik に據り、「中央核心地方」と餘り密接なる關係を有しない外部地方」即ち滿洲地方新疆省、外蒙古、西藏を度外視すると、二三省に分たれた支那本土は人口四二六・六百萬人とせるも同樣に取扱ひ得べし)に就き見積り過大の疑を挿みつゝ、滿洲を合算せる支那本部の人口は眞らく四億前後を出でざらん、こは一平方哩平均二一一人の人口密度を授くとせる Stamp は言へり、支那地表の形勢山岳に富めること、その結果として人口が肥沃なる盆地及平原に集中することは、此の計數の意義を輕微ならしむ、假令ば大體に農土なる江蘇省の全人口密度は八七〇及八八〇の間にあるも、その密度は純農業地區に於てさへ相當大面積の地に亙り三乃至四千人に及び得べきや前にも一言せるが如しと Rohrbach も亦山東省に就き自作農民甚だ稠密なるを說き、普漏西の半大なる一地域に約三千萬人の人口あり、その主大衆は全く農民たるを說き、その購買力が全く收穫の豐凶により左右さるべきは自然の數なりと附言したり。[18]

玆に尙附說するを無益とせざるは農業支那の思想的背景にあり、凡そ衣食住問題は由來支那人の眼に大きく映じたり、こは素より何れの社會にとりても必然然りとすべし、されど支那人は現世的なるをその理想中に宿すこと(一例によれば會見の機に於ける挨拶お茶召しましたか御飯召上りましたか「吃了飯了麼」(チーリアフハクノアマ)さへも飲食に亙る)何れの民衆よりも大なりき、一義によらは唯物的性向あるをその特色とすとも說かれ得べし、試みに想へ國家行動の土臺と

17) cf. Stamp, op. cit., pp. 162, 172.
18) cf. Stamp, op. cit., pp. 469, 470; Rohrbach, a. a. O. S. 102.

なれる諸哲學思想上生活の自然的基礎に關心すること著大なりしや確かなるを、又太古に遡り文化の跡を探り得べき限りに於て、そは意識的に農業に依存し又之が振興に努めたるを、又秦の始皇帝が天下を統一するに當り理論上の根據となせる法家（特に商鞅）の言說は社會の經濟組織に重きをおけるを、又道統永くその流れを垂れし儒者の教にありては文明たるべしとせば衆庶が衣なく食なきを許さるべきに非ずとの事實を認めたるを、唯幾世紀を通じ尊崇を繫ぎ得たる固有哲學中道家（老莊列）のみは肉體の享樂に專心なるを誹り、人をして肉の諸縲絏より脫却せしめんとす、茲に併せて注意すべきは本來の道家と之に比し宗教的色彩を加ふること多き道教とを區別すべきことなり、後者は後漢の張道陵により創められ唐代に至り天下にその勢を張りし所なり、その後も今日に至る迄深く民衆の精神に浸透し、その實生活を支配し來れり、こは支那に起りその民族性に基づき且つ古代より傳承したる多神教、天人合一の思想に立脚しつゝ、その當時の天文醫術等を巧みに取入れ神仙說その他種々の迷信巫術をも加味して、金銀を化し、符水（マモリフダ）を行ひ、將に老子の學より出でたりと稱し彼を天仙の長としその思想を以て教理を飾るも、そは神仙の術を講ずる者老子に附會したるに過ぎず、同時に佛教に倣ひて劫數を說き又之に擬して諸種の經典（特に代表的なる文昌帝君太上感應編。辭源曰、書名、宋史藝文志及道藏皆著錄、其書出於抱朴子、而其詞託於太上、太上者、最上之稱、爲老君之師、其旨在勸善懲惡、與書作善降祥不善降殃之說合、淸有惠棟東姚學塽合注本、甚精博ト）を編成し、儒者の實踐道德をも加へ一大體系を整へて成れる宗教なり、されどその實質は現世的にして名利に媚び目的とする所は福祿壽の三字に盡くと謂はる、其の說によるに邪累を去りて心神を淸め行を積みて功を樹て德を累ねて善を增さば白日天に上りて長生するを得べしとす。[19]

19) cf. Latourette, op. cit., II, p. 65 ff. 市村瓚次郎 瀧川龜太郎纂著、支那史三の七二頁；國民百科大辭典、第六卷、202頁。神保勝世、支那の宗教參照。

右の一點に於て支那は印度と根本的に異ると謂ひ得べし、實際上印度人の大多數もその肉體の生存を保つの鬪爭に逐はるゝこと如何に多しとするも、理論上はこの煩累を離脱せんとするを例とし、禁慾隱遁を尊び現在顯現の世界を一幻影と觀念するの傾向ありき、此理由あるがために又輓近西洋に於ける意見の風潮に卷込まるゝこと印度人に比し一層容易なり得たるを指示し得べし、その相違は第二十世紀に入り自國民の熱烈を最も多く喚起したる二人に就きて窺はる卽ち一方には禁慾的に西洋大工業主義より國民を救ひ出さんと希望せるGandhiを見たるに、他方には孫逸仙あり、自己は嗜欲に恬淡なりしも禁慾的たらず、西洋の機械的仕組を支那より排斥せんと希望するが如き愚擧に出でず、國民生計の憂なからんことを力說し、西洋に莫大の資本を仰ぎて支那鐵道伸張の事に當り、國民の經濟發展策を唱道したり、唯物主義なりとして西洋を譏れるTagoreと科學的知識及人の自然的環境利用上西洋に競はんことを國民に望む胡適（米國に學びし同氏主張の批評は兎も角としその一著Hu Shih, The Development of the Logical Method in Ancient China. 1922 昭和二年の同譯本井出季和太胡適の支那哲學論は現代支那人の著書として注目を値ひするものゝ一たり）との對立は、右二人の對立以上に注目を引く。

右思想的背景を控へ支那が由來國土の經濟生活に意を注ぎ又依然としてその狀を續くるは怪しむに足らず、國土の生產分配問題を徹底的に論ぜんとせる結果社會主義の試圖を見しこと一再ならざりしも、亦偉觀とするに足らず、王莽及王安石の事績も要は儒者並に古代法家者流により通常有效として承認されたる吏權統制可能主義を誇張的一形式の下遂行せるに外ならず。

社會主義に類せるもの支那人の思想上全く無緣なりしとするを得ざるも、淸朝及その以前の幾多朝代の下帝政

々治は著しく自由放任政策たりき、素より政務如何によりては政府の干渉も行はれたり、貨幣鑄造は政府の手に握られ、鹽賣買は政府の獨占たり、そは消費者の利益を計り代價を低廉ならしめ品質を改善するの一方便としてよりも、寧ろ收入源として然り、嚴密なる監察は外國貿易に加へられ、課稅の形式により徵收せる米を貯ふる國立倉廩は飢饉の際代價を平準し窮乏を救ふがために使用されたり、吏僚は通常荒地の處分を決定し、一不動產への地券はその認可なくしては入手し得べくも非ざりき、されど帝國政府及地方役所は大體には國內の農工商業に就き何等の政權を及ぼさざりき。

吏僚の干渉を比較的に受けずと謂ふもそは普通に所謂個人の自由主義が國內經濟界に横溢せるを意味せず、寧ろ之と反對に制律は吏僚分管政治により加へられざりしも、地方的政治外の諸機關假令ば家族、同職組合等により行はれたり、されば實際事態は殆んど自由放任の反對たりき、個人は好む所に從ひてなすの自由あるなく、風俗慣習と諸協同機關の密網とにより周密に覊束されたり。

右の組織は輓近西洋資本家本位の經濟組織とは著しく異れり、舊支那は動產による富の大蓄積を有せざりき、大富豪は土地、質屋、夥しき衣服、寶石及地金銀の形式によれり、數百人數千人の放資を一企業に集むるの便備はれる株式會社は存せざりき、合名合資組合、同職組合、秘密結社及家族は特色ある經濟的諸合同形式たりき、又輓近西洋人多數民族に反し支那は經濟的には殆んど全く自足的たり國土の總取引上外國貿易の嵩高くは上らざりき、支那は今日さへも殘餘の世界より交通を絕たれたればとて、衣食につきては不便を感ずるの度著しきことなきを得ん。